木の櫟

■

靖上井

社英集

欅の木

昭和四十六年七月三十日　初版発行
昭和四十六年九月十日　二版発行

定価　九八〇円

著者　井上靖
発行者　陶山巌
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二の五の十
郵便番号　一〇一
電話　東京（二六五）六一一一
振替　東京一五六五三
印刷所　大文堂印刷株式会社
製本所　有限会社石橋製本工場

著者との了解により検印を廃止します
乱丁・落丁本はお取替えいたします

©1971 Y. Inoue

0093-770061-3041

目

次

ある日曜日　七
赤い花白い花　三
早春　九
夢　一六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新しい緑　三八
風　二五八
あじさいの花　三一〇

装幀　関野準一郎

欅の木

ある日曜日

潮田旗一郎は朝食後、自分の書斎に引き込んだ。少し書きものをしなければならぬからということにして、自分の部屋にはいったのであるが、別にそんな仕事を持っているわけではない。折角の日曜日であるから、ひとりでのんびりしていたいだけのことである。

旗一郎はあけて五十七歳である。還暦にはまだ多少間があるが、この二、三年自分の年齢を考えると、何となくあわただしい気持に襲われる。もうあんまり若くはないのだぞというような声が、どこからか聞えて来る。そうした声はいつも聞えるわけではないが、何かの拍子にふいに聞えて来る。今朝も、それが聞えた。

旗一郎は書斎にはいると、すぐ縁側に出て、そこにある籐椅子に腰をおろして、手伝のおばさんに運んで来て貰ったお茶を飲み、煙草をふかした。妻の光子が顔を出して、

「いいですか、ちょっと」

と言った。何か話さなければならぬ用件があるらしいことは判っていたが、

「いまは、困る」

「ちょっとですのよ、ほんの五分ほど」

「いいや、あとにしてくれ」

旗一郎は言った。

「いかなる用件であれ、日曜はごめん蒙りたいな。あしたにして貰いたい」

「日曜以外は家にいらっしゃらないじゃありませんか。日曜だって、いつもいらっしゃるわけではない」
それから、
「あの、例のことなんですが、どうします?」
光子は言いながら部屋にはいって来た。縁側の籐椅子に夫と向い合って腰をおろすつもりらしい。
「いまは、困る。今晩、聞こう。これから書きものをする」
「会社の雑誌の原稿なんでしょう」
「新聞に出す原稿だ」
「新聞へ? 変なことを書かないで下さいよ、この間みたいに」
それから光子はこの時気付いたらしく、
「あら、また煙草!」
と言った。二、三日前に、禁煙を宣言したことは事実である。
「改めて、のむ」
「何も、そんなに威張らなくても」
光子は言った。
「ご自分で禁煙を宣言なさったんですよ。わたしたちが言い出したんじゃありません」
「そう、判っている」
「すぐ、またのみ出すんでしたら、わざわざやめるなんて、おっしゃらない方がいい。子供たちにからかわれるだけですわ。意志薄弱の見本みたい」
「確かに、俺は禁煙を宣言した。そして宣言した通り、煙草をやめた」
「二日だけじゃありませんか」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「三日だ」
旗一郎は訂正して、
「三日やめてみたら、ばからしくなって、またのむことにした。こんどは死ぬまでやめないでのむ。ついでに言っておくが、酒も飲みたいだけ飲むことにする。節酒なんてしない」
「どうぞ」
それから、
「子供たちには、そんなこと、威張っておっしゃらないで下さいよ。決して感心したことではないんですから」
「子供には言わん」
「会社でもおっしゃらない方がいいわ」
「会社でも言わんが、新聞には書く。コラム欄に書く」
「どうぞ。——さぞ、反響があるでしょう、読者から」
「あると思う」
「どうぞ、お書き遊ばせ、ぞんぶんに。——では、例の話は、あとにしましょう」
光子は部屋を出て行った。案外あっさり出て行ったと思ったら、廊下の向うで電話のベルが鳴っている。
——さあて、
と、旗一郎は思った。さあて、と思ったが、ひとりになっただけのことで、別にすることがあるわけではなかった。新聞のコラム欄の執筆を引き受け、二、三回書いているが、こんどの締切はまだ三日ほど先である。何を書くか決まっていなかったが、いまの光子との会話で何となく書くことが決まったような気持だった。
旗一郎は日曜の午前中に、こうしてひとりで籐椅子に腰かけている時間が一番好きである。何も考えないで

ぼんやりしている。ぼんやりしていると言っても、いつまでも、ぼんやりしているわけではない。ぼんやりしているうちに、何となく考えることが自然に顔を出して来る。停年になって何年も経つ社員のことや、高校時代の友人のことや、もう何年も会っていない従兄弟のことなどが、何となく思い出されて来る。こういうとりとめないことを考えている時間を持つことが、近頃の旗一郎には人間として大切なことに思われている。

いつものことだが、ごく自然に自問自答がくりひろげられてくる。

——お前の父親が亡くなった時いくつだったか、憶えているだろうな。

——憶えているよ。

——六十歳だったんだぞ。丁度還暦だった。その還暦に、お前も近づいてきたぞ。

——判っているよ。

——お前は今年五十七歳になった。親父の享年までには三年しかない。三年だぞ。三年ということは、一年が三つしかないということだ。

——親父が六十で亡くなったからと言って、なにも、俺の人生が六十で断ち切られるわけのものではない。人間の寿命はのびている。確か平均寿命は六十八か九になっている筈だ。

——お前の父親が六十で亡くなったから、お前もそうだなどとは言っていない。ただ事実を告げているだけのことだ。お前の父親は無欲だったが、お前は欲が深い。少しでも長く生きようと、ゴルフをやったり体操をやったりしている。見ていると、あさましいくらいだ。今のところでは八十までも、九十までも生きそうだ。

——そんなに生きるつもりはないよ。

——嘘を言ってはいかん。生きたい、生きたいと思っているではないか。新聞に長寿村の記事など出ると、何はさておき、そこだけは熱心に読んでいる。

——そう、確かに読んでいる。が、参考のために読んでいるだけのことだ。
——参考のためにしては、どうも読み方が熱心すぎる。読むだけならいいが、この間は切り抜いて、本の間にはさんでいたではないか。あとで、もう一度読み返すつもりだったのだろう。
——冗談言って貰っては困る。読み返したりはしていない。
——それは、はさんでおいた本を忘れたからだ。あとで、何にはさんだのかと思ってさがし回ったではないか。それにしても、はさんでおいた本を忘れるようなところなどは、はっきりした老いの徴候だ。そろそろ物忘れがひどくなっている。気をつけた方がいい。
——判っている。
——判っている、判っていると言うが、いっこうに判っていない。あわよくば、もう一度恋愛の経験を持ちたいなどと考えているではないか。
——そりゃ、考えないこともない。
——年齢を考えろ。父親の享年までは三年しかないんだぞ。
——だから、もう一度、本当の恋愛という奴をやれるものなら、——
ここで、旗一郎は自問自答を中止した。光子が部屋にはいって来たからである。
「電話です」
光子は言った。
「だれから?」
「秋山さんという方から」
秋山というのは、確か幼稚園の友達である。この間コラム欄の原稿を読んでなつかしかったといって、手紙をくれた男がある。何でも豊橋の幼稚園でいっしょに遊んだ仲だと、そんなことが認められてあった。ひどく

記憶のいい人物である。こちらは何も憶えていない。しかし、父親の任地であった豊橋で、短い期間、小さな幼稚園に通ったことは事実であった。だから、その人物の言うように、その幼稚園でいっしょに遊んだ仲かも知れない。旧友であり、旧知であることは確かだ。確かだが、こちらはいっこうに憶えていない。幼稚園の建物も憶えていないし、園児が何人ぐらいの幼稚園であったかさえも記憶にない。

「用件を聞いておいてくれ」

旗一郎は言った。

「会社の方？」

「いいや、昔も、昔、大昔の友達らしい」

「では、やはり電話口にお出にならなくては」

「いや、代って聞いておいてくれ。いかなる用件か見当のつかぬところがある」

旗一郎は気むずかしい顔で言った。光子は去って行った。旗一郎はうんざりした。折角自分だけの思いにはいっていたのに、また初めからやり直さなければならぬと思った。

暫くすると、光子は戻って来て、

「紀州の海岸で浜木綿（はまゆう）の栽培をやっているとかで、その浜木綿を送ったという報せでした。庭の陽当りのいいところに植えて下さいと言っていました」

「ほう」

「昔いっしょに遊んだので、その記念として送るから、受けて下さいって。なかなかいい感じの人」

光子は言うと、部屋を出て行った。

旗一郎はひとりになると、また自問自答に戻った。

――お前には、どうも身勝手なところがある。折角幼稚園の友達が電話をかけてよこしたというのに、なぜ

電話口まで出てやらないんだ。そういうところは、お前のなっていないところだ。
——いかにも。
——いっこうに人間はできておらん。
——いかにも。
——秋山という幼な友達は、今ごろ何とも言えず不快になっているに違いない。わざわざ浜木綿を送って来るなどということは、人間なかなかできることではない。
——そう。だが、俺にも言わしてくれ。確かに俺は電話口に出るべきだった。結果からみれば、出ないより出た方がよかった。しかし、大体うす気味悪い話ではないか。こっちは全然知らない相手なんだ。五つか六つの時の友達だ。
——向うは知っていた。
——向うが知っているということの責任を、こちらが負う必要はないだろう。
——お前は、すぐそういう考え方をする。もっと素直になった方がいい。秋山という人物は、お前と遊んだことの思出を持っている。どんな思出か知らぬが、その思出を何十年も失わないで持って来ている。長い人生において、時折、お前のことを思い出し、お前のことをなつかしく思っていたのに違いない。そうした相手の気持をうす気味悪いとかなんとか言って、お前はじゃけんにつき離した。お前は、もしかしたらお前の人世において、めったにめぐり会えぬ大切なものを、塵あくたのように棄ててしまったかも知れないのだ。
——そうかも知れん。しかし、好意の押売は困る。こちらとしては浜木綿を貰ったら礼を書かねばならぬ。考えてみれば迷惑千万な話だ。俺はこれまでそんなことばかりして来た。もうやめようと思う。もっと自分本位に生きる。もう五十七歳だからな。
——そう、あと三年だ。三年で父親の享年と同じになる。自分本位に生きるのもよかろう。それに徹するの

なら、大いに結構。だが、いっこうに徹しないではないか。

――いや、これから徹底的に自分本位に生きる。心にもない生き方はいやだ。自分の気持を大切にする。

――できたらやってみなさい。たれもとめはせん。

お手伝のおばさんがやって来た。

「お電話でございます」

旗一郎は顔の筋肉をこわばらせた。毎日のように、電話、電話で暮しているので、日曜日だけは電話から解放されたいと思うのであるが、なかなかそれができない。

大体、電話というものは変なものである。相手の顔が見えないで、声だけが聞えて来る。お互いに相手の喋っている表情を勝手に想像しながら、言葉だけを交換する。それで用件を片づけるのであるが、考えてみると、危険な話である。対話であるには違いないが、喋る相手の顔が見えないので、それを喋っている人間の気持というものはてんで判らない。恐れ入りますとか、申しわけありませんとか言うが、どの程度恐れ入っているのか、申しわけながっているのか、その点はまるっきり見当がつかない。どうも、普通の会話とは別に電話独特の話術というものがあるらしい。旗一郎はいつも用件を引き受けさせられる相手がある。断わろうと思うが、その人物にかかると、妙に何でも引き受けさせられてしまう。有無を言わせぬものが、独特な快適なテンポで運ばれて来る。そして相手の受話器を置く音が響いて来た時、またやられたと思うのであるが、あとの祭である。

「だれ?」

「清水さんという方です」

清水と言われても思い当る人物はなかった。

「出掛けていると言って貰いたい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com